

紙芝居 ‘初めての日本語学校’ –ピラポ移住 55 周年に寄せて–』

【 序 文 】

先の『パラグアイ便り』でパラグアイの学校についてのコラムがありました。また、2011 年の震災の際に、当地で造られたお豆腐が日本に届けられたことも紹介されていました。今回はピラポに移住を開始した当時の日本語学校の設立関係者の苦勞が偲ばれる紙芝居 ‘初めての日本語学校’ の実物を紹介しましょう。

その前にピラポを簡単に説明します。地名ピラポの語源は、移住地の中央を流れるピラポ川に由来し、「ピラポ」とは、パラグアイの先住民族の言葉であるグアラニー語で、「ピラ」は魚、「ポ」は手を表し、「魚が手づかみできるほど多い」の意味とも言われています(注:「パラグアイ日本人移住五十年史」より引用)。アスンシオンからエンカルナシオンを經由して陸路約 440 キロ、南東に位置する緑豊かな田園地帯です。

パラグアイ移民の第一歩が刻まれるのは 1936 年ですが、その後の大きな移住の波は第 2 次世界大戦後に始まりました。日本海外移住振興会社が購入したピラポの地も、1960 年入植開始時には全くの原始林、入植者が斧で大木を一本ずつ切り倒しながら、文字通りゼロから荒地を切り拓きました。それがいまでは大豆の大穀倉地帯に変貌し、当国輸出に大きく貢献しています。

また、こんにゃくいもなど日本食の食材となる様々な野菜も栽培・加工して販売しています。卵は生卵で食べられるほど新鮮で、おいしい日本米も生産しています。日系人には農場経営で成功した人が多く2世も日本語が堪能です。また3世も小さい頃から日本語を学び、数多くの多彩で伝統的な年中行事(慰霊祭、敬老の日、成人式、運動会、様々な年齢層別の野球大会、女子のソフトボール大会、男女相撲大会など)に家族ぐるみで参加しています。こうした行事の開会式に流れるパラグアイと日本の両国歌を聞くと、パラグアイ大地と日系人社会との一体化を強く感じます。

それでは紙芝居 ‘初めての日本語学校’ の紹介に入ります。この紙芝居の筆者は小田(コダ)さんとお母様の鈴木さん、作画は四方(ヨモ)さんで、入植から 37 年が経過した 2007 年にできたものです。

(紙芝居作成に係った方々)



この紙芝居を読むと、教育重視、祖国の文化を継承しながら異国の地で励まし合う日系社会の姿、共通の目標のための献身的な努力、進歩、明るさを感じます。また、移住当時の女性が果たした、また現在も果たしている様々な役割を具体的に示しています。この紙芝居を通して、なぜ移住地で日本語を学ぶ必要があるのかという原点に立ち返る日本語教育関係者もいると思います。

この紙芝居の主人公、作者達に加え、それ以降日本語教育に尽力した人も多数います。現在パラグアイでの日本語学校は、各移住地や大都市に合計9カ所あり、ピラポで日本語を学ぶ日系人生徒は約 150 名ほど。昔のような苦労は少ないものの、日本から遠く離れて色々な問題を乗り越えながら、学校が運営されています。また、JICA から派遣されている日系社会シニアボランティア、日系社会青年ボランティアはじめ日本の教育関係者、国語の教科書等教材の送付にあたる国内の関係団体の支援を受けています。日本語学校は、これからも多くの日系人子女の将来を見据えて、当地での日本語教育や日本文化の伝達に欠かせない基地となりますので、皆様のご支援をお願いします。



(左から小田美和氏、
永見悦子前ピラポ日本語学校校長)



(左から久保喜代登現校長、
工藤好雄ピラポ日本人会会長)

最後に、ピラポ移住 55 周年を迎えるにあたり、心から祝福するとともに、今後のますますの皆様のご発展をお祈り申し上げます。

(石原圭子 在エンカルナシオン領事事務所 2015 年 5 月)

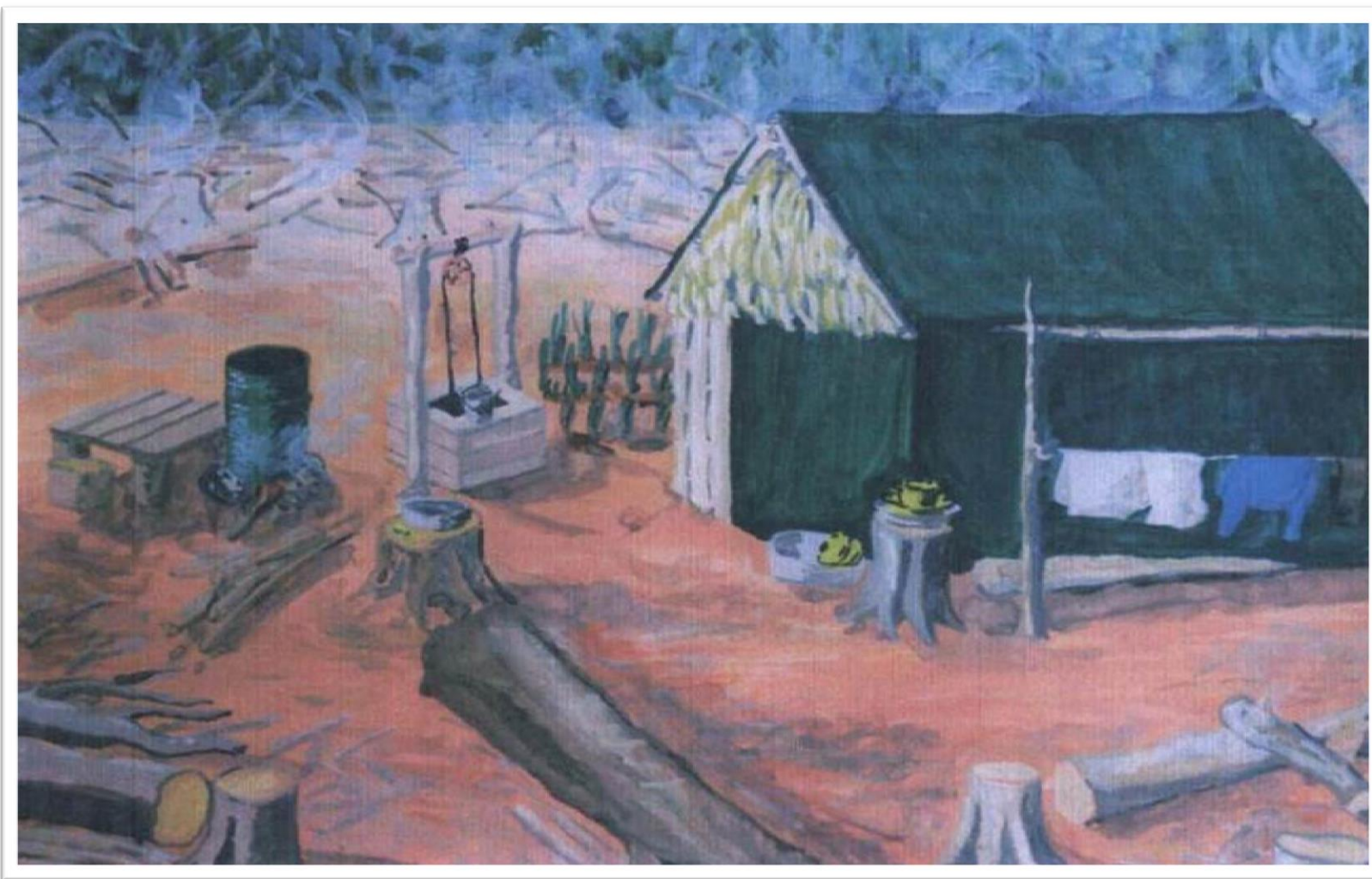
初めての日本語学校

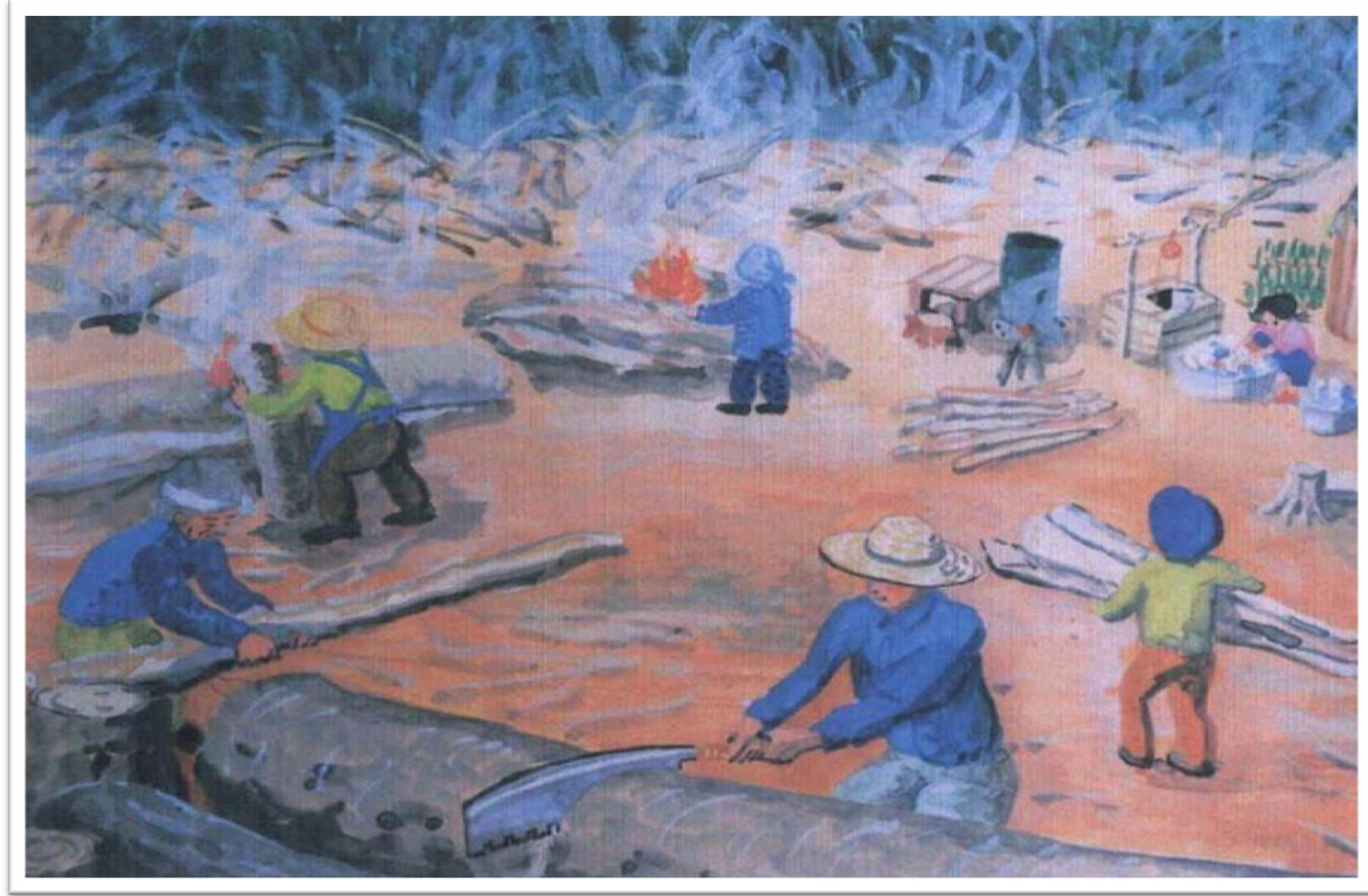
① 一九六一年、たくさんの人々が大きな夢を抱いてピラポに移住しました。皆さんは、移住について考えたことがありますか？。あるいは、おじいちゃんおばあちゃんにお話を聞いたことがありますか？。移住した当時、ピラポは原始林でした。みんな「働け、働け。」の毎日でした。けれども、大人達は、「子供達に 日本語を覚えてほしい、日本語教育をしなければいけない。」と、いつも考えていました。

それでは、これから、日本語学校がいつ、どこの地区で始められたのかを紙芝居を通してお話していきますと思います。



②一九六一年、入植が始まり 中でもピラポ23キロ地区には三ヶ月の間に七十五家族が入植しました。たくさんの人でした。現在のピラポ23キロ地区の支所付近に 収容所という、移住したばかりの人達が入る所がありました。けれども、この収容所は次の移住者が来ると、出て行かなければなりませんでした。だから自分の土地に仮小屋を作り、そこに住んだのです。私達には想像のできない生活です。大人は毎日、原始林を切り開き 畑を作りました。日本の学校を後にして来た子供達は、いったい何をしていたのでしょうか。



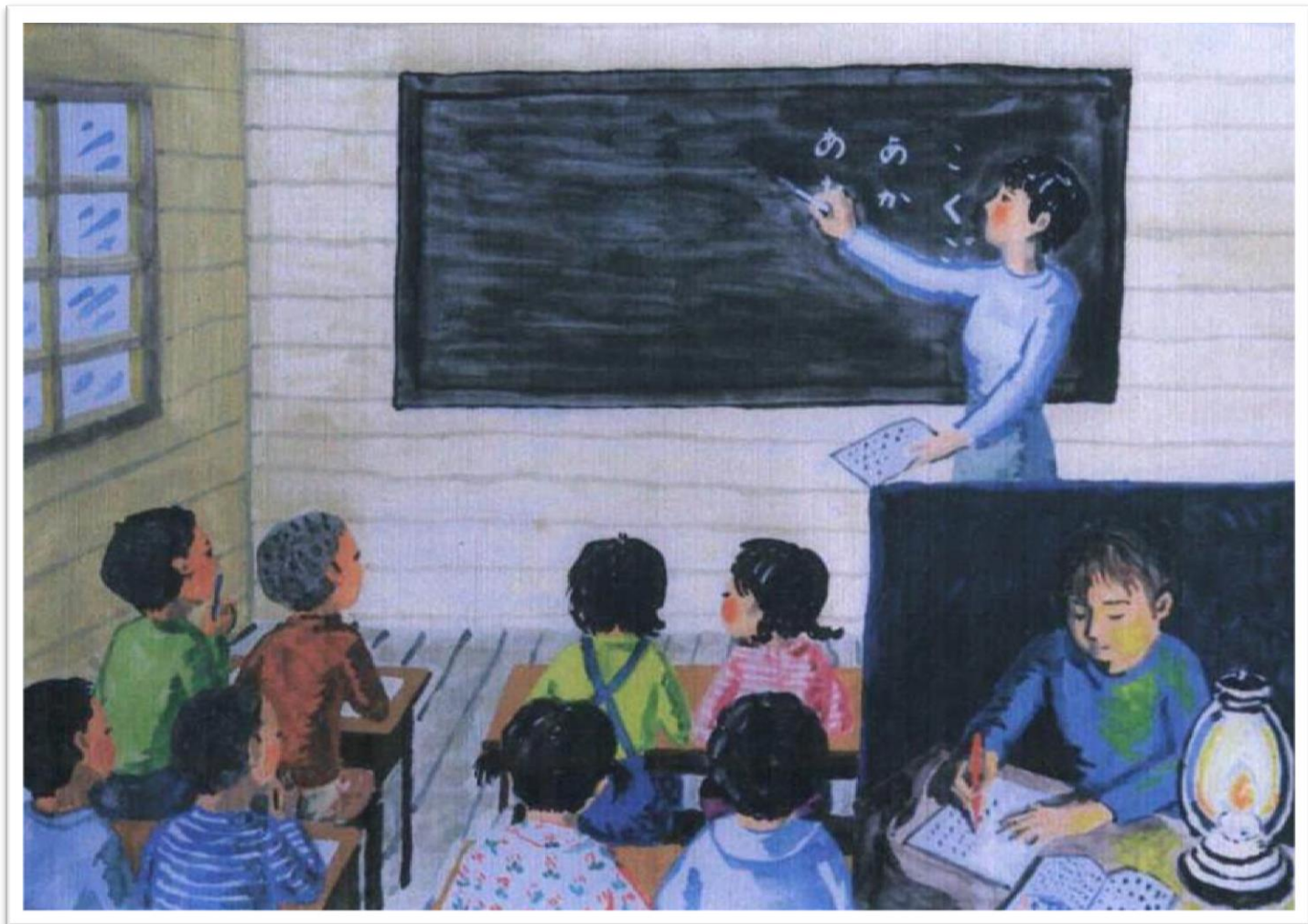


③男の子は、毎日真っ黒になり、原始林を切り倒した後の寄焼きの手伝い。女の子は水くみ、洗濯、炊事。洗濯機も水道もありません。水は井戸から、つるべで汲み上げなければなりません。女の子にとっては、とつても厳しい仕事でした。そして、仮小屋に残された子供達は心細い、不安な日々を送りました。

お父さんやお母さんは、あせりました。

「このままではいけない。何とかして子供達を教育しなければ・・・。」

こうして一九六二年、ピラポ23キロにスペイン語学校が開校しました。



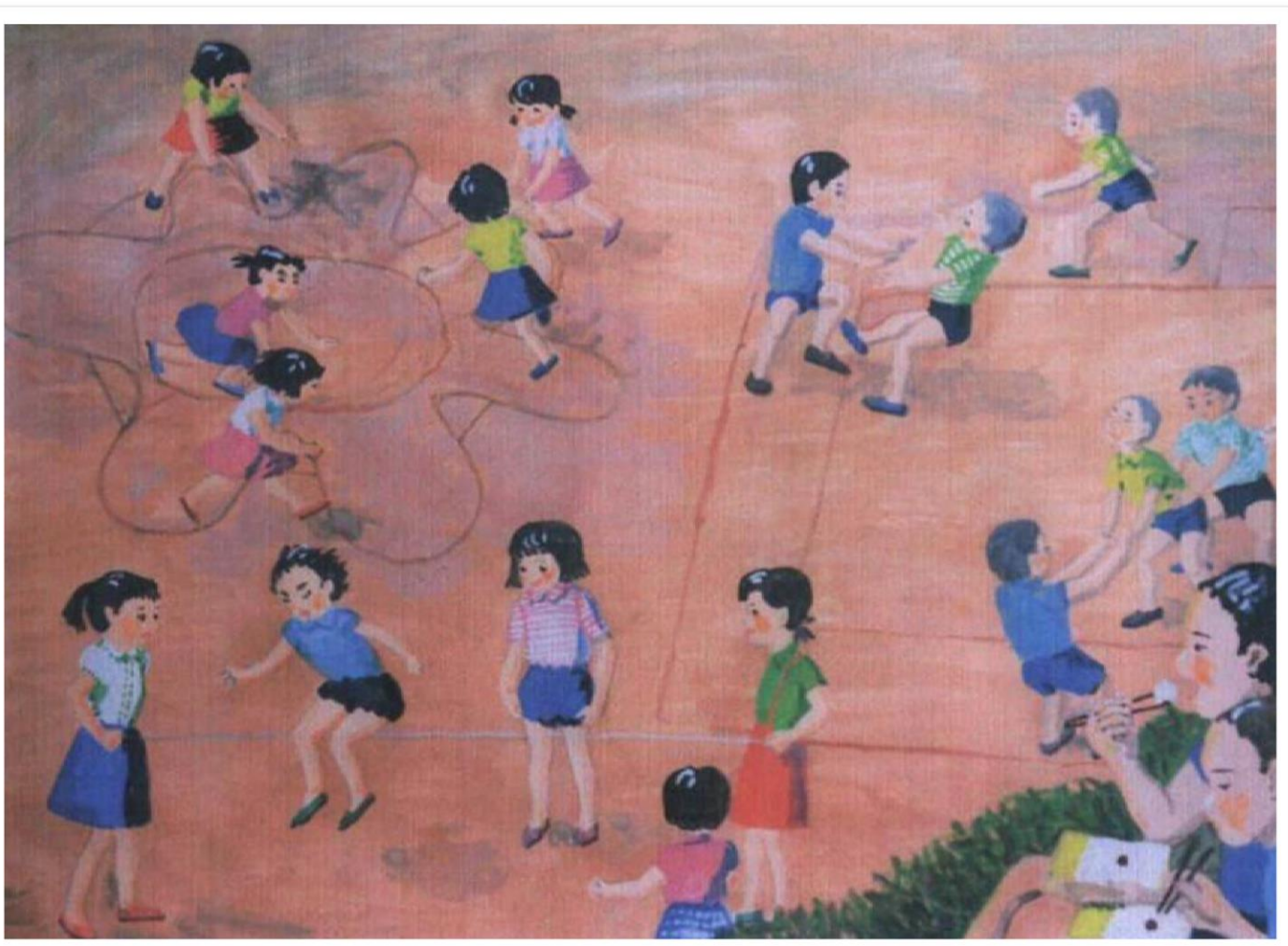
④そして、翌年一九六三年にようやく地区の人々が一丸となって、日本語学校を始めました。校舎はスペイン語学校を使用し、授業は週に一度にしました。先生は幸い、日本で経験したことのある方がおられました。それは岩見光子先生と田中里美先生です。生徒は一年生と二年生だけです。けれども四十名近くいました。教具も教科書もありません。二人の先生は子供達が日本から持って来ていた教科書を ランプの明りで一文字一文字夜なべをして手書きしました。そして、一人一人の子供達に配り、教科書の代わりにしたのです。先生は、大変苦勞されました。

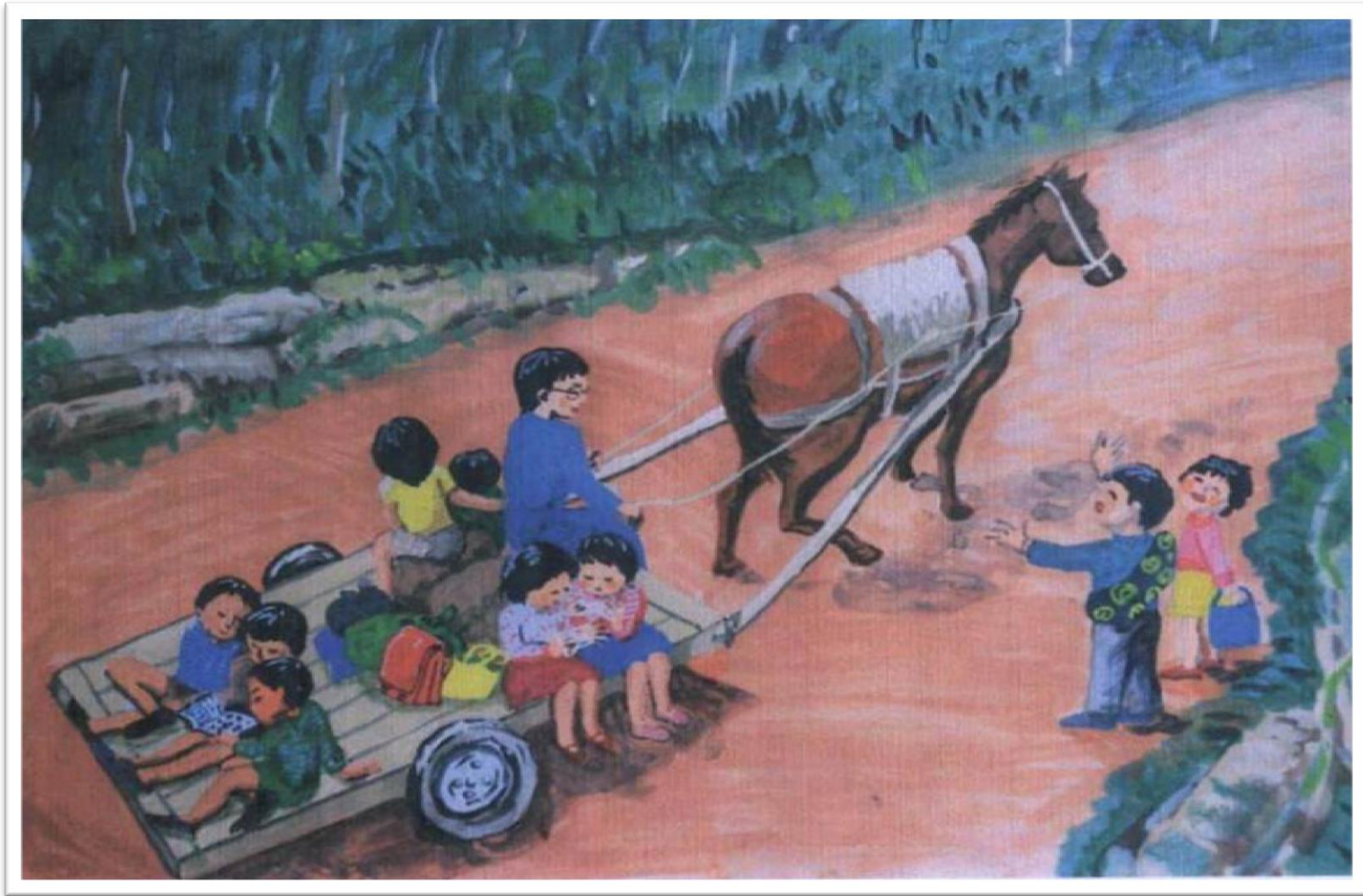
⑤ 学校での子供達の楽しみは、お昼のお弁当と休み時間の遊びでした。

お昼のお弁当はごはんとお焼き、ただそれだけです。お店に行っても今のようには沢山の品物がなかったのです。サラメやサバ缶、ピカディリョはごちそうだったので。お友達と一緒に食べるお弁当は、とても楽しみでした。

休み時間、男の子達は力いっぱい押し合いへし合いをして、肉ダンという遊びをしました。女の子はおはじき、あやとり、なわとび、ゴムとびなどをして楽しみました。

ところで、この原始林の中を、子供達はどのようにして学校へ通っていたのでしょうか。





⑥ 毎日、遠い道のりを歩いてです。

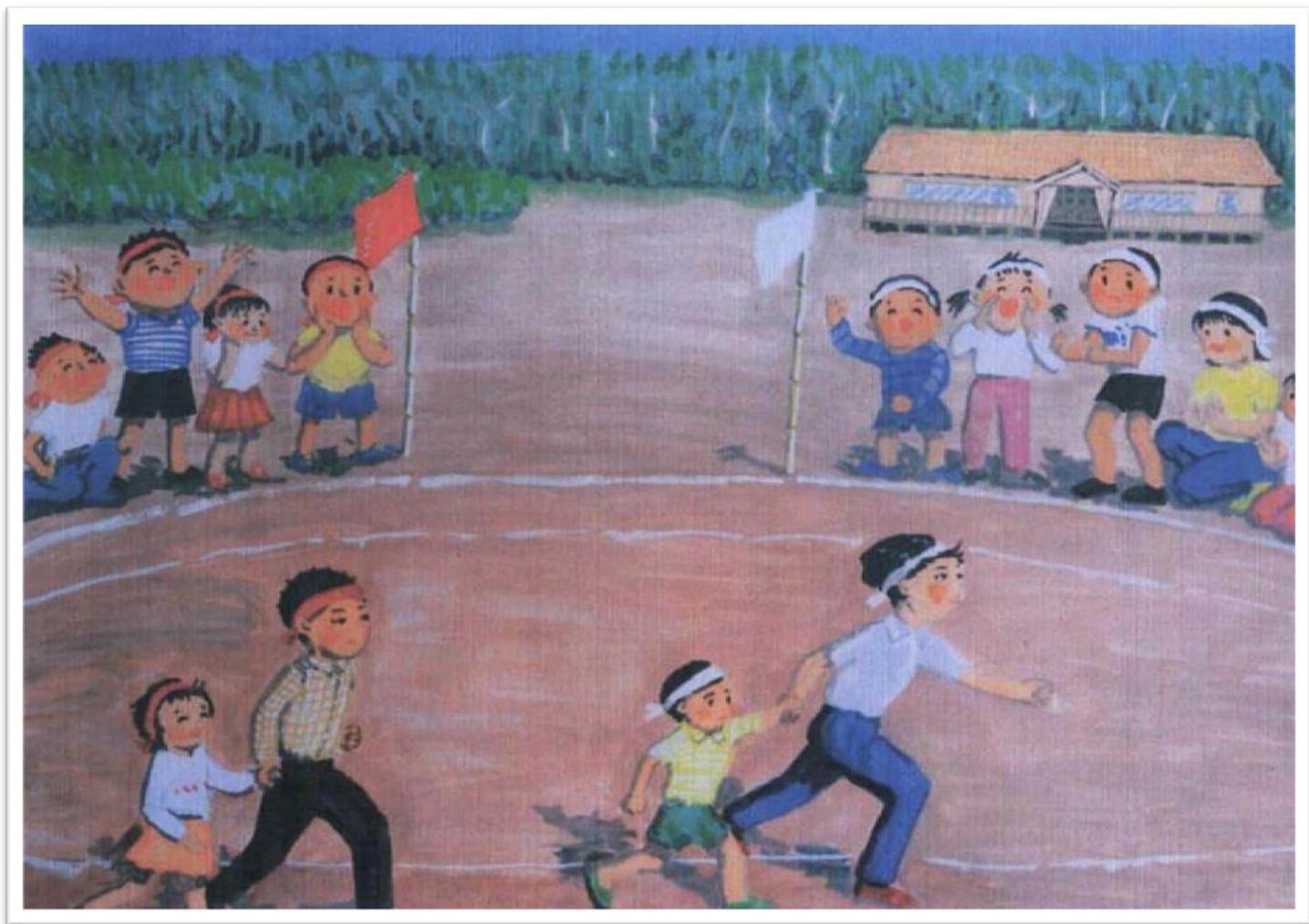
学校から遠くに住んでいた岩見先生は、馬車を持っていました。学校に通うことは、買い物もかねていたのです。

岩見先生の方角に家がある子供達は、先生と一緒に馬車に乗って通学しました。

でも多くの子供たちは、毎日、遠い道のりを歩いたのです。

原始林の中の道のりは長く長くとても厳しいものでした。

雨が降れば子供達は通えないので学校は休みでした。

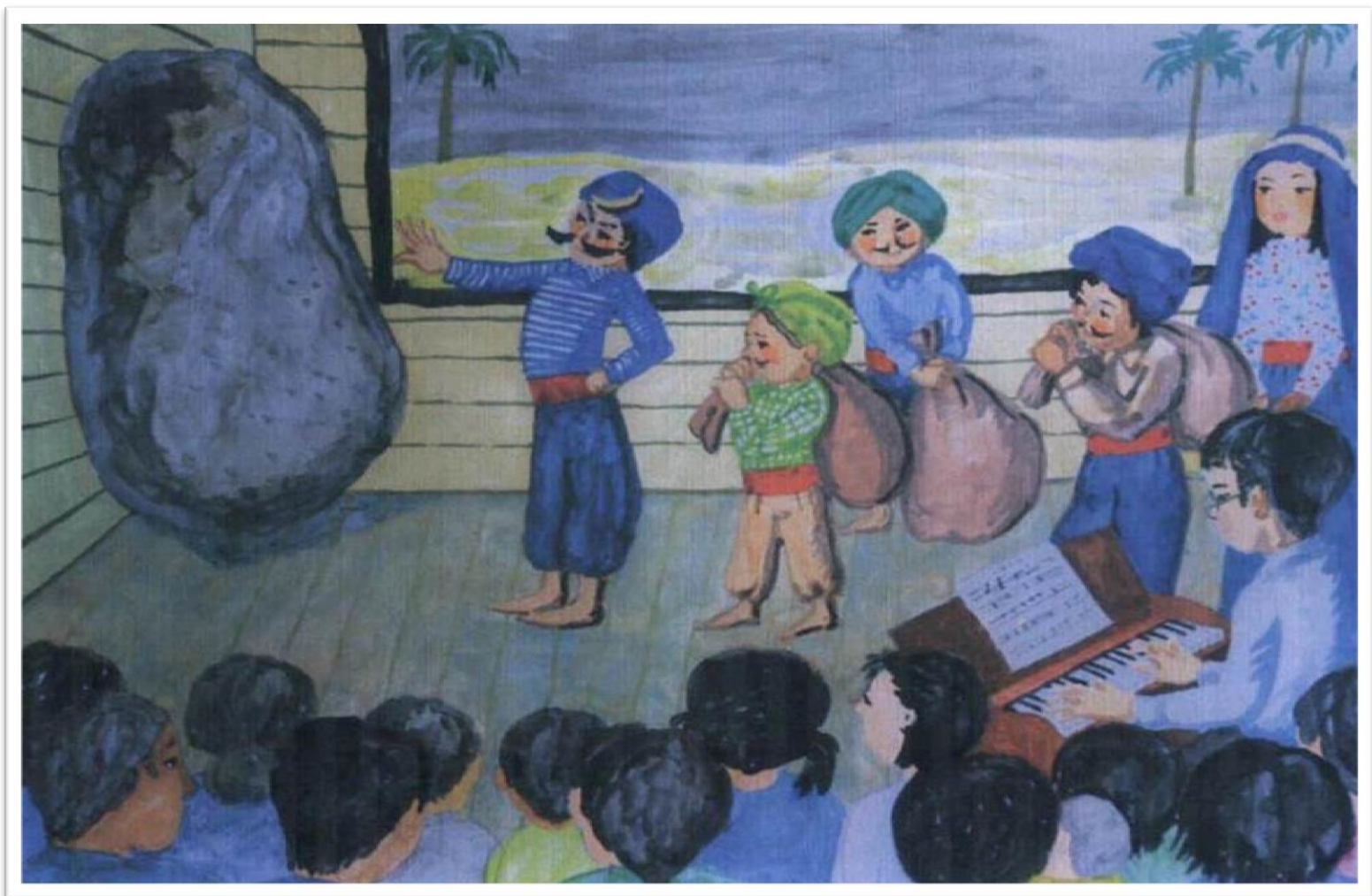


⑦ 日本語学校の勉強は今のよう国語だけではありません。算数もありました。また、運動会もあったのです。

田中先生と岩見先生は知恵を出し合い、日本の学校で行っていた、競技や種目を考えました。そして地区の人々は、日本の運動会を思い出しながら、楽しい一日を過ごしたのです。

運動会の歌もあり、岩見先生のオルガンに合わせて、子供達は元気いっぱい大地に響かせました。

一台きりのオルガンは宝物でした。それで学習発表会もやりました。



⑧ 学習発表会では、朗読、唱歌、遊戯、劇などさまざまの発表が行われました。オルガンに合わせて、アラビアンナイト・万寿ひめ等も演じられました。次第に、子供達は人の前に出て発表する力をつけるようになりました。一年目にただの通行人として出演していた子供達も、翌年には、堂々と自信を持って演じることが出来るようになったのです。

学芸会は、発表力を養う一番大事な行事でした。

⑨授業参観もありました。そして、学期末には通知表が配布されました。全て手書きで、心のこもった貴重なものでした。

こうして日本語学校は一步一步確実に、日本の文化を取り入れながらでき上がっていったのです。そして、翌年以降ピラポの日本語学校を参考にして、各地区で次々日本語学校がスタートしたのです。

これが、私達が知らなかったはずとずっと昔のこと……ピラポに出来た初めての日本語学校だったのです。

文 小田 美和

鈴木 峯子

絵 四方 都

資料作成に協力していただいた方。

岩見 光子

田中 里美

当時の日本語学校の同窓生の皆さん。

